

この研究室が面白い！

8

早稲田大学大学院日本語教育研究科
細川英雄研究室

もともとは国語学、今でいう日本語学に携わっていましたが、国語教育の現場での実践やフランスでの日本語教育経験を経て、外国語としての日本語教育に関心を移しました。そこから、ことばと文化の関係についても考えるようになりました。

そもそも「文化」とは何でしょう。茶道や源氏物語とかの個別具体的なものとしては示せますが、「文化」そのものに実体はなく、認識枠組みの一つとして考えられます。ところが、教育には情報を伝えるという側面がありますから、どうしても日本語教育

には実体としての日本文化を教えるということが伴ってしまふ。そうするとある種のステレオタイプの日本文化や日本人像を押しつけることにながりがねない。


だから言語教育で大切なのは、文化を教えることよりも、まずはステレオタイプに陥りがちな状況を問いなおすことになるはず。でも今の言語教育ではそういう認識があまり共有されていません。

ではその状況にどう対応すべきか。その辺の問題も含めて今回の本で論じています。が、ひとつには、思いこみを崩

し更新することが必要です。それはアイデンティティを揺り動かし、ときには不安やストレスを与えることでもあります。

今までの言語教育はそのままで踏み込めていない。「言語教育とは何か」という問題提起が生まれなまま、外国語教育はただの道具論・技術論に陥っています。グローバルゼーションの名のもとに猛威をふるっている英語教育はその最たるものです。

他方で科目としての国語教育は、文学作品をどう読むかという解釈に関心がいきがちで、生徒一人一人の表現の場

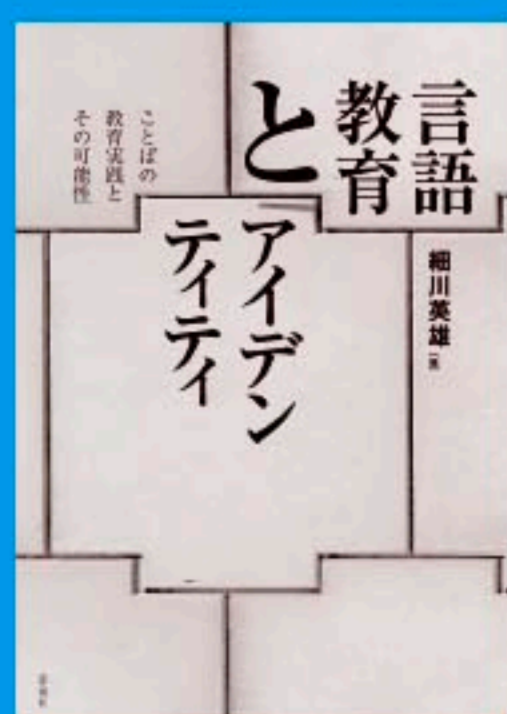


アイデンティティを揺り動かすこと、それがことばの教育の仕事です。

には関心が向けられていない。日本語教育・国語教育・外国語教育がそれぞればらばらでつながっていないんです。それを問い直し、それぞれの連携のための議論の場をつくるのが私の仕事です。

(インタビュー 丘)

新刊!



細川英雄編

『言語教育とアイデンティティ』